

医学部ウォーカー

1面：医学研究科長・医学部長寄稿「健康増進プロジェクト・ウェルネス・ヘルス・イノベーション」の設置にあたって
2面：「ウェルネス・ヘルス・イノベーション」の設置にあたって「明治安田×弘前大学QOL共創研究所」の設置にあたって
3面：第58回臨床腎移植学会優秀ポスター・演題を受賞して／第270回日本泌尿器科学会東北地方会優秀演題賞を受賞して／はやぶさカレッジでカナダへ短期留学
4面：2025年度ロータリー米山記念奨学生に合格して／岩木健康増進プロジェクト・プロジェクト健康、いきいき健康を終えて／第108回弘前医学学会総会大館市で開催
5面：第108回弘前医学学会総会優秀論文賞を受賞して／令和6年度弘前医学学会優秀論文賞を受賞して／鶴岡会総会に出席して
6面：実験動物施設／成績優秀学生表彰／科学研究費補助金採択状況
7面：外科手術体験セミナーin青森を開催して／弘前大学に入学して／解剖学実習を終えて
8面：クリクラについて
9面：台湾・馬場戦争学院での臨床実習を終えて／OO・GB書籍出版物の紹介
10面：若手教員・医師だより／若手研究者紹介動画
11面：研究室紹介 感染症生体防御学講座・皮膚科学講座
12面：部活動紹介 ブラジアン柔術・地域医療サークルコボプラ／人事異動

題字 元弘前大学長 遠藤正彦氏筆

医学研究科長 寄稿

朱に交われれば赤くなる

.. 弘前大学の新たな挑戦

医学研究科長 石橋 恭之

弘前大学が「地域中核・特色ある研究大学強化促進事業（JPEAKS）」に採択されたことはこれまでも紹介してきました。これは我々にとって飛躍のチャンスであるとともに大きな試練ともいえます。申請書で掲げた方策や高い目標を、実践し確実に達成していかなければなりません。

このため、学内では全学的な研究力向上戦略実行会

議が開催されることとなりました。また、採択直後の二月には、採択大学と文部科学省との政策懇談会があり、三月には令和六年度採択大学に対する事業評価の考え方に係る説明会、四月には伴走支援総合調整会議が開催されており、JPEAKSでは単に戦略的実行経費や研究設備等整備経費といった大きな交付金が付与されるだけではなく、

では、前年度採択大学のこれまでの（といっても採択後まだ一年ですが）成果発表がありました。他大学の先進的な取り組み、また伴走チームサポーターからの高い視点からのアドバイスの数々は、我々にとっては大きなプレッシャーではありますが、刺激にもなっております。人は交わる友や環境によって良くも悪くも影響を受けるといふことで、「朱に交われれば赤くなる」という諺があります。

JPEAKSの一員として、優れた環境や志を共にする他大学と共に歩むことで、弘前大学はさらに大きく成長し、より良い方向へと変化していくものと前向きに捉えたいと思います。

医学研究科では、健康未来イノベーションセンター

共創研究所

「明治安田×弘前大学QOL共創研究所」の設置にあたって

明治安田×弘前大学QOL共創研究所 教授 玉田 嘉紀

令和七年（二〇二五年）四月一日付で医学研究科に共創研究所「明治安田×弘前大学QOL共創研究所」が設置されました。弘前大学としては初の共創研究所の設置となり、同年六月五日に医学研究科において開所式を執り行いました。本共創研究所は弘前大学と明治安田生命保険相互会社（東京都千代田区）並びに株式会社明治安田総合研究所（東京都千代田区）（以下、両者合わせて「明治安田」と）との共同で設置されたもので、開所式には、明治安田からは同総合研究所フェロー・加藤大策氏、同

執行役員・石田純一氏、同総合研究所代表取締役社長・森本律子氏、同企画部ヘルスケア事業企画室長・福井淳二氏、同取締役執行役員開発支援部長・岩根孝典氏、明治安田システム・テクノロジーズ株式会社取締役執行役員DX推進部長・宇川嘉之氏にご臨席いただきました。研究所の設置期間は令和十年（二〇二八年）三月三十一日までとなっております。開所時の構成員は、弘前大学からは玉田嘉紀教授、村下公一教授、伊東健教授、三上達也教授、中路重之特別顧問、沢田かほり助教の六名、明治安田

からは加藤大策氏、石田純一氏、福井淳二氏、森本律子氏、瀬領大輔氏の五名で、全部で十一名の体制となっております。

QOL（Quality Of Life）は、日本語では生活の質と訳されるように、人々が健康で安心できる暮らしのことを指し、この向上が弘前大学COINEXTの掲げる「ウェルビーイング向上」にも直結する概念です。弘前大学と明治安田は既に平成三十年（二〇一八年）に共同研究講座「未病科学研究講座」を開設し、弘前大学が開発したQOL健診を全国で実施したり、京都大学を

未来に繋げるような新しいアプローチを通じて、暮らしによりそう研究に取り組む予定です。弘前大学の健康ビッグデータとAIを活用した研究成果の利活用によりQOL健診の向上を目指し、健康ビッグデータの成果の社会実装、そして、より多くの人々にとってのQOL向上をこの研究所の研究を通して目指すことがこの共創研究所の使命と考えています。

医学研究科の皆様方のご支援・ご協力・ご鞭撻のほど、どうぞよろしくお願い申し上げます。





共同研究講座

「先端フアイトケミカル健康学講座」 開設にあたって

先端フアイトケミカル健康学講座 教授 伊東 健

令和七年四月一日に丸善製薬株式会社（以下、丸善製薬）との共同研究講座「先端フアイトケミカル健康学講座」を設置し、開設式が令和七年六月二十三日に弘前大学医学研究科にて執り行われました。開設式には、丸善製薬から、日暮泰広代表取締役社長、栗原浩誠執行役員・研究開発本部長、研究開発本部から吉野進氏、塩飽力也氏、栢木宏之氏にご参加いただき、弘前大学からは福田眞作学

長、石橋恭之医学研究科部長、村下公一副学長、三上達也教授、玉田嘉紀教授と私が参加しました。学長からは丸善製薬が共同研究をしている秋田県今野商店の今野宏社長が、学長の高校の同期であるとの紹介もあり、一層のご縁が感じられました。先端フアイトケミカル健康学講座には、村下副学長、玉田教授、三上教授、多田羅洋太助教と私が参加し、丸善製薬からは栗原浩誠研究開発本部長、

基盤技術研究部の木曾昭典部長、新穂大介氏、西谷洋輔氏、吉野進氏、塩飽力也氏、栢木宏之氏が参加します。

丸善製薬はこれまで自然の恵みをつなぎ、人々が美しく健康でいられる社会に貢献することをパーパスとして、植物の二次代謝物を健康増進のための機能性成分として広く社会実装してきました。その代表例としてポリフェノールがあり、多くの疫学研究などから健康増進に対する有効性が支持されていますが、吸収率

が低く、作用機序には未解明な点も多くあります。例えば、試験管内や動物モデルではポリフェノールが抗酸化作用により細胞死を防ぐといった多くの報告がありますが、通常ヒト血中では試験管内で効果を発揮したポリフェノール濃度に達することはなく親化合物の酸化作用がヒト生体内で発揮されている証拠はほとんどありません。実際にヒトで植物由来成分がどのように機能しているのか考えると、生体利用率の低い植物の二次代謝物が腸内細菌に代謝された後に機能している可能性が有ります。例えば、コーヒーやリンゴに含まれるクロロゲン酸、柑橘類に含まれるヘスペリジン、米ぬかに含まれるオリザノール、ウコンに含まれるクルクミンなど一部

のポリフェノールは、腸内細菌によって代謝されると共通して3-(4-hydroxy-3-methoxyphenyl) propionic acid (HMPA) になります。これまでに丸善製薬ではHMPAについて抗肥満作用、血糖値上昇抑制作用、LDLコレステロール低減作用などの健康効果を見出してきました。本共同研究講座では植物由来成分の機能性発揮を多角的に捉え、岩木健康増進プロジェクトを通じて植物由来成分およびその代謝物を対象にそれらの濃度や変動するバイオマーカー、生活習慣、食習慣、健康指標との関わりを明らかにし、人々の健康寿命の延伸に貢献することを目的とします。皆様の温かいご指導・ご鞭撻をいただきますよう、どうぞよろしくお願い申し上げます。

共同研究講座

「ウェルネスフードイノベーション講座」 （おいしくたのしくすこやかに研究） （森永製菓） の設置にあたって

ウェルネスフードイノベーション講座 教授 伊東 健

令和七年五月一日に森永製菓株式会社（以下、森永製菓）との共同研究講座「ウェルネスフードイノベーション講座（おいしくたのしくすこやかに研究）」を設置し、開設式が令和七年七月十四日に弘前大学医学研究科にて執り行われました。開設式には、森永製菓から、執行役員・研究所長 渡部宏之氏、研究所健康科学センター長 家本直季氏、同センターから西村栄作氏、志賀遼太郎氏、瀬戸陽介氏にご参加い

ただき、弘前大学からは福田眞作学長、石橋恭之医学研究科長、村下公一副学長、三上達也教授、玉田嘉紀教授と私が参加しました。森永製菓は、「世代を超えて愛されるすこやかな食を創造し続け、世界の人々の笑顔を未来につなぎます」をパーパスとして掲げ、食や運動が心と体の健康に及ぼす影響について、研究を進めています。これまでも、ポリフェノールの一種であるピセアタンノールを含むパッションフルー

ツ種子抽出物が、ヒトにおいてサーチュイン遺伝子（長寿遺伝子）の発現を増加させることを世界で初めて確認するなど、人々のウェルネスの向上に貢献する研究を進めてきました。ウェルネスフードイノベーション講座には、村下副学長、玉田教授、三上教授、多田羅洋太助教と私が参加し、森永製菓からは研究所健康科学センター長 家本直季氏をはじめ健康科学研究センターから、内田裕子氏、織谷幸太氏、

【受賞報告】第21回韓国H.pyloriシンポジウム

Young Investigator Awardを受賞して

消化器内科、血液内科、免疫内科 野宮 洋樹

この度、二〇二五年三月二十一日に韓国ソウルで開催された第二十一回韓国H.pyloriシンポジウム・シンポジウムにおいてYoung Investigator Award (YIA) を受賞しましたことを御報告いたします。今回、「Evaluation of diagnostic accuracy of fecal antigen measurement by biolumi-

nescent enzyme immunoassay (BLEIA)」という演題で受賞させていただきました。胃がんの発症に関与する因子としてH.pyloriは最も関連があり、H.pylori除菌による予防が勧められています。H.pyloriの感染診断を正確に行うことが重要であり、便中抗原測定法は他の非侵襲的な検

査と比較して診断精度が高く、世界中のガイドラインにおいて推奨されています。便中抗原測定法は二〇二〇年に従来のEIA法ではなく、生物発光酵素免疫測定法 (BLEIA) による検査法が保険適応となりました。BLEIAの特徴はホルタルの光を触媒する酵

西村栄作氏、志賀遼太郎氏、瀬戸陽介氏、川上晋平氏、月足元希氏、木村遥香氏が参加します。本共同研究講座では、弘前大学及び弘前市が二〇〇五年以降実施してきた「岩木健康増進プロジェクト」の健康ビッグデータ解析を通じて、食生活、運動、社会的生活に関係する各種指標を評価し、ウェルネスに関わる製品やサービスを創出することで、青森県民をはじめとした人々のウェルネス向上に貢献することを目的とします。血液における遺伝子発現解析やその他の「岩木健康増進プロジェクト」等で得られたビッグデータを利用し、食や運動が健康に与える影響について、関係関係、因果関係を明らかにする研究を行います。また、その利用方法を産官学共同で議論するとともに、疾病予測モデルの技術の研究・開発し、普及を図ることので人々のウェルネスの向上に貢献することを目指します。この十月からは志賀氏と瀬戸氏が本学医学研究

科の大学院生として一緒に勉強させていただくことにもなっております。皆様の

温かいご指導・ご鞭撻をいただきますよう、どうぞよろしくお願い申し上げます。



(前ページより)

素であるルシフェラーゼを用いた検査で従来法より高い精度とされています。しかしながらBLEIAについては新しいキットであるため報告は少なく、今回、感度と特異度を報告しました。二〇二一年の岩木プロジェクトに参加した五百三十六例を対象とし、血清抗Hyalin IgG抗体検査や血清ペプシノーゲン濃度により感染診断を行い、BLEIAの結果と比較しました。結果、BLEIAの感度は九二・九%、特異度は九九・八%であり、非常に高い精度でした。BLEIAは短時間で多くの検体を測定することが可能で、今後は日常診療の他、大規模な検診での感染者の抽出に

も有用であると思われる。待たれます。ドイツスカッソンでは韓国では便中抗原測定法において便の採取が一つのハードルになるとコメントをいただきましたが、日本では便検体の採取に抵抗感をもつ方は多くないように思え、国による検査の感じ方の違いに驚きました。最後に、今回の受賞に際し御指導いただきました光学医療診療部珍田大輔准教授をはじめ、デイスカッションで助けていただいた青森総合健診センター下山正克先生及び、支援をいただきました消化器血液



免疫内科学講座櫻庭裕丈教授やその他多くの先生方から心より感謝申し上げます。コロナ禍を経てこのような国際学会に参加となり、とても良い経験となりました。誠にありがとうございました。

【受賞報告】第270回日本泌尿器科学会 東北地方会

優秀演題賞を受賞して

泌尿器科学講座 佐々木 大地

このたび、秋田市で開催されました第二百七十回日本泌尿器科学会 東北地方会にて優秀演題賞を受賞しましたのでご報告いたします。

今回は症例報告「エンホルツマブ・ベドチンおよびペムブロリズマブ併用療法が奏功した転移性膀胱癌の一例」につき発表しました。一般的に根治切除不能な尿路上皮癌は予後不良ですが、近年免疫療法およびエンホルツマブ・ベドチンの登場により新たな治療選択肢が増えつつあります。エンホルツマブ・ベドチン(EV) およびペムブロリズマブ(Pembro) 併用療法(EVP) はランダム化比較試験で根治切除不能な尿路上皮癌において既存の抗癌剤治療と比較して有意に予後を改善し有効性を示しました。また、尿路上皮

癌における術後補助化学療法法のニボルマブ(Nivo)のランダム化比較試験より術前化学療法(NAC)を施行した症例、PD-L1 (Programmed death-ligand 1) 陽性の症例ではさらに予後改善に寄与する可能性が報告されております。こうした背景がある中で実際に奏功した症例について報告させていただきますのが今回の症例報告になります。

本症例では膀胱癌CT3N0M0の診断でNACとしてGemcitabine (Gem) およびCisplatin (Cis) を二コース施行後にロボット支援下膀胱全摘除術および回腸新膀胱造設術施行。術後一年で多発肺転移・リンパ節転移・局所再発を認めEVP開始し四か月でCR達成。その後末梢性感覚ニューロパチー Grade2が回復せずEVP投与終了するも、Pembroは二年継続し終了しました。現在無治療でCRを維持しております。EVPが奏功した理由として、本症例はNAC後の膀胱全摘除本においてPD-L1陽性でした。当科での先行研究よりNAC施行後の膀胱全摘除本におけるPD-L1陽性率はNAC前のTURBT標本と比較して上昇することが分かっております。術後補助化学療法におけるNivoのランダム化比較試験のサブ解析よりNAC施行群およびPD-L1陽性群で予後良好であったこととを踏まえ、NAC後にPD-L1陽性となったことでPembroが奏功した可能性が考えられました。また、遺伝子解析を施行しましたところ間葉系マーカー(EMT)の上昇を認めました。最近の報告でEMTマーカーの上昇は免疫療法における治療抵抗因子となる可能性が報告されてお



佐々木大地先生と畠山真吾教授

【受賞報告】第58回臨床腎移植学会

優秀ポスター演題賞を受賞して

泌尿器科学講座 講師 岡本 哲平



いる先生方、研究室の皆さま、そして臨床現場で協力してくださったスタッフの皆さまのおかげで、このような榮譽ある賞をいただくことができました。この場をお借りして、心より感謝申し上げます。

このたび、第五十八回臨床腎移植学会において、「移植前の血中FK濃度日内変動とBKウイルス感染症発症の検討」と題した演題で、優秀ポスター演題賞を受賞いたしました。本研究は、二〇二五年三月にClinical and Experimental Nephrologyに掲載された原著論文をもとにしたものであり、日頃からご指導くださって

本研究では、腎移植後の重大な合併症の一つであるBKウイルス(BKV)感染に着目しました。BKVはほとんどの人が小児期に感染し、腎臓や尿路に潜伏感染の形で存在します。健康人では問題となりませんが、腎移植後の免疫抑制療法によって再活性化し、時にBKV関連腎症を引き起こします。この腎症は診

断・治療が難しく、進行すると移植腎の機能喪失に至ることもあるため、早期発見と予防が重要とされています。しかし現在のところ、BKV感染に対する確立された予防法や治療法は存在せず、感染リスクを事前に評価する指標の確立が喫緊の課題となっています。そこで私たちは、術前に投与する免疫抑制薬・タクロリムス(TAC)の血中濃度の変動が、術後のBKV感染に影響を与えるのではないかと仮説を立て、当院で腎移植を受けた百三十五名のデータをもちに後方視的な検討を行いました。術前一

日のTAC血中濃度の時間的推移とBKV感染の発症リスクとの関連性を検討しました。その結果、術前十二時間におけるTAC濃度の低下幅が大きい場合、BKV感染のリスクが有意に高くなることが明らかとなりました。サンプルサイズは小さく単施設研究のため結果の解釈には注意が必要ですが、今後の術前免疫抑制薬管理において、新たな指標として活用される可能性があります。別件にはなりますが、当

院で二〇〇六年に弘前大学腎移植ユニットを結成して移植開始してから二〇二五年六月で生体、献腎移植を含めて二百例に達しました。長期成績に関しては、国内のハイボリウムセンタールと比較しても良好な結果となっています。これからはさらに安全と良好な結果に繋がるようにチーム一丸となって取り組んで参ります。そして臨床の現場から生まれる問いを大切に、患者さんの予後改善につながるエビデンスの構築に努めてまいります。

報告

はやぶさカレッジでカナダへ短期留学

終末期医療と死生観の違いを学んで

医学科四年 中野 皐月

私は、二〇二五年二月十五日から三月十日まで、弘前大学の国際教育プログラム「はやぶさカレッジ」に選拔され、カナダ・ブリティッシュコロンビア州のThompson Rivers Universityに短期留学しました。はやぶさカレッジは、学生が自身の関心に基づいて調査テーマを設定し、海外で実地調査を行う実践型の留学プログラムです。私は「安楽死と死生観」をテーマに、医療的支援による死

し、患者さんの予後改善につながるエビデンスの構築に努めてまいります。

滞在中は、ホスピスや調剤薬局を訪ね、現場の医療従事者から制度の実情について話を聞きました。また、州が主催する市民向けの公開講座にも参加し、終末期ケアに対する社会的な理解や関心の高さを実感しました。さらに大学院の講義では、カナダの医療制度の歴史的・倫理的背景を学び、現地の医療体制を多角的に捉える視点を身につけることができました。

カナダの人々は、死というテーマに対して率直に向き合っており、「どう

生き、どう最期を迎えるか」を自然に語り合う姿勢が印象的でした。医療者もまた、患者の意思を尊重し、自己決定を支える体制が社会全体で整えられていることに感銘を受けました。一方で、日本では日本老年医学会が安楽死に対して慎重な姿勢をとっており、文化的にも「協調性」や「家族との関係性」を重視する傾向があることから、「死を自ら選ぶ」という選択に対する捉え方は大きく異なります。そのため、「死を自ら選ぶ」とい

(次ページへ続く)

（前ページより）

う行為に対する受け止め方は、カナダとは大きく異なっていることを、現地での調査を通して感じました。

また、カナダは多民族・多文化国家であり、州ごとに法律や医療制度が異なります。今回の調査はあくまでブリティッシュコロンビア州に限定されたものであり、カナダ全体を代表するものではありません。今後は他の地域や国との比較も視野に入れ、さらに学びを深めていきたいと考えています。

この経験を通じて、私は医療とは単なる治療や延命の手段ではなく、患者一人



上段：ホスピス見学の様子
下段：イエローナイフでの夜

2025年度ロータリー米山記念 奨学生に合格して

大学院三年（産科婦人科学講座）

宋

双



この度、二〇二五年度ロータリー米山記念奨学生として採用いただくこととなり、大変光栄に存じます。この場をお借りして、心からの感謝と共に、その喜びと決意を報告させていただきます。

ロータリー米山記念奨学金は、日本のロータリークラブが運営する民間最大規模の国際奨学金制度であり、毎年多くの外国人留学生の学業と研究活動を支援するとともに、ロータリー

ンの皆様との交流を通じて国際理解を深める機会を提供しています。日本に留学してから、私は母国で学び得なかった多くのことを学び、日本の先生方、友人、地域の方々に支えられながら研究と生活を続けてきました。しかし、留学生活は必ずしも順調なことばかりではなく、経済的負担や研究への不安、文化や習慣の違いによる孤独感を感じることも少なくありませんでした。今回、この奨学金に採用されたことにより、経済的な負担が軽減され、安心して学業と研究に専念できる環境が整いました。

また、この奨学金を通じて、日本社会への理解がより深まりました。本財団が

開催する行事を通じて地域社会の温かさに触れるとともに、日本社会が異なる文化を尊重し、共生しようとする姿勢を肌で感じることで、そして医師と患者が互いに尊重し合う姿勢が医療において非常に重要であることを学びました。これらは私が母国ではなかなか学ぶことができなかった視点であり、今後の研究と将来の医療実践の中で活かしていきたいと考えています。

今回の奨学生選考に際し、産科婦人科の飯野香理先生には申請書の修正や面接練習、志望理由の整理について親身にご指導いただきました。また、横山良仁教授には推薦状を作成していただくとともに、研究の方向性やキャリアの展望に

【いきいき健診】五月二十一日から二十六日までの六日間にわたって実施いたしました。今年の対象者は平成二十九年に初回参加された皆様です。ご高齢・衰弱を理由に健診会場に来られなくなる方が年々増えており、これまで七日間で実施していた健診も今年は六日に短縮して開催いたしました。一方で、会場に来られた方は皆様笑顔で、こちらも元気をいただきました。

いきいき健診は、九州大学を拠点とするAMED（日本医療研究開発機構）の「健康長寿社会の実現を目指す」大規模認知症コホート研究の一環として実施しています。弘前市では平成二十八年と二十九年の二年間で参加者を募集しており、各々十年間追跡予定でしたが、AMEDの事業（本学以外の他拠点）は今年度で終了予定となつて

一般演題終了後、優秀発表者の選考が行われました。発表者でもあった橋本先生を除いた座長三名に、青木昌彦先生、大徳和之先生を加えた五名の先生に審査していただきました。審査委員長の和嶋直紀先生より選考の結果、原裕太郎先生（消化器外科科学講座）の「食道胃接合部原発神経内分泌癌混在腫瘍は噴門腺か（次ページへ続く）」

岩木健康増進プロジェクト・プロジェクト 健診、いきいき健診を終えて

先制医療学講座 教授 三上達也

今年の岩木健康増進プロジェクト・プロジェクト健診、いきいき健診を予定通り実施することが出来たのでご報告いたします。

【岩木健康増進プロジェクト・プロジェクト健診】（写真参照）

五月三十一日から六月九日までの十日間にわたって

実施いたしました。これまでに、岩木地区の住民を対象に実施していた岩木健診ですが、昨年からは、岩木地区の住民を優先したうえで、岩木地区以外の弘前市民にも枠を広げて実施しております。昨年は、岩木地区以外の弘前市民枠が予約開始初日に全て埋まってしまったため、今年はさらに百名分、弘前市民枠を増やして千三百名を対象に募集しました。追加分の枠は、二日目からの受付時間を十分早めることで対応しました。



【いきいき健診】

今年、受付から最終チェックまで五十八ブース設置して実施いたしました。コロナウイルスの影響もほばない状況でしたので、会場内に設けた休憩所で数年ぶりにおにぎりを提供しました。その時間を利用して、当日の体組成計の

についても温かい励ましと貴重なアドバイスをいただきました。この場を借りて、深く感謝申し上げます。



今年、受付から最終

おり、次年度以降どのような形で開催するか弘前市とも相談して皆様にご案内したいと思っています。

市民公開講座を予定しております。両健診にご支援・ご協力いただいている皆様に心から感謝申し上げます。来年度以降も継続予定ですので、今後とも何卒よろしくお願い申し上げます。

第108回 弘前医学会総会 大館市で開催

弘前医学会庶務幹事 漆 館 聡 志
（形成外科科学講座 教授）



石橋恭之 弘前医学会長

好天の初夏となった令和七年六月二十八日に、大館北秋田医師会と弘前医学会の共催で第百八回弘前医学会総会が開催されました。会場となった秋田県大館市の杉の子プラザには六十一名の参加者をお迎え致しました。

総会長である大館北秋田医師会長工藤透先生の開会のご挨拶の後、総会が行われ、令和六年度事業報告お



漆館聡志 庶務幹事



一般演題終了後、優秀発表者の選考が行われました。発表者でもあった橋本先生を除いた座長三名に、青木昌彦先生、大徳和之先生を加えた五名の先生に審査していただきました。審査委員長の和嶋直紀先生より選考の結果、原裕太郎先生（消化器外科科学講座）の「食道胃接合部原発神経内分泌癌混在腫瘍は噴門腺か（次ページへ続く）」



特別講演 講師 中永士師明

（前ページより）
ら発生し予後を悪化させる」に決定したことが発表されました。研究の独自性、今後の発展性などが高く評価されました。原先生へ総会長の工藤透先生より賞状と副賞が授与されました。
続いて優秀論文賞の発表が行われました。令和六年度発行の「弘前医学75巻」掲載の原著論文十編を対象とした選考の結果、池田裕一先生（健康未来イノベーション 研究機構）の「Examination of factors that lead to the transition of community-dwelling older adults to a state requiring support and care : A longitudinal study on factors influencing locomotive syndrome」が受賞されたことが弘前医学編集委員長花田裕之先生より選考経過とともに発表されました。池田先生へ弘前医学会会長石橋恭之先生より賞状と副賞が授与されました。
続いて吉原秀一先生を座長にお迎えし特別講演が開催されました。講師は秋田大学大学院弘前医学系研究科医学専攻病態制御医学系、救急・集中治療医学講座教授中永士師明先生にお願いし「秋田県のクマ外傷事情（クマージェンシー・メデイシン）」という演題名で御講演いただきました。近年

熊外傷が増加傾向であり、特に被害の多かった秋田県の現状について、熊の生態や、熊外傷の特徴、治療など多岐にわたって御講演いただきました。トピックな話題であり、会場から多くの質問がよせられ、関心の高さが伺えました。
その後に行われた懇親会では、美味しいお酒とお料理をいただきながら多くの



先生方と親交を深めることができた。大館北秋田医師会の皆様方には改めて心より厚く感謝申し上げます。
今回の第百九回総会は、弘前市医師会長柿崎良樹先生を総会長として、令和八年六月二十日（土）弘前市の弘前パークホテルにおいて開催いたします。皆様の御参加をお待ちしております。

第108回弘前医学会総会 優秀発表賞を受賞して

消化器科学講座 助教 原 裕太郎

第百八回弘前医学会総会において優秀発表賞を頂いた平成二十七年卒業の原裕太郎と申します。私は現在、弘前大学消化器外科科学講座上部消化管グループで診療に従事させていただいております。日常臨床の中で遭遇するクリニカルケースからテーマを決定し基礎研究で病態解明をさせていただいております。第百八回弘前医学会総会において「食道胃接合部原発神経内分泌癌腫混在腫瘍は噴門腺から発生し予後を悪化させる」という題名で研究の成果を発表させていただきました。食道胃接合部癌は近年増加している疾患であり、日常診療でも対応することが多い疾患です。食道胃接合部腺癌の治療に当たると、若年発症の食道胃接合部癌の予後が悪いことが気になり、その分子病態病理学

令和六年度弘前医学会 優秀論文賞を受賞して

健康未来イノベーション研究機構 特任助手 池田 裕一

この度は、令和六年度弘前医学会優秀論文賞という栄誉ある賞を賜り、心より光栄に存じます。選考に携わっていただいた先生方に感謝申し上げます。今回の受賞は、ひとえにご指導くださった指導教員の保健学研究科の対馬栄輝先生、日頃より支えてくださった対馬ゼミの皆様、さらに長年にわたり健康ビッグデータの蓄積と活用に尽力されてきた中野先生、村下先生をはじめ、弘前大学COIの皆様の支援の賜物であると、深く感謝申し上げます。受賞論文では、「Examination of factors that lead to the transition of community-dwelling older adults to a state requiring support and care : A longitudinal study on factors influencing locomotive syndrome」というタイトルのもと、ロコモティブシンドローム（ロコモ）の変化と運動機能、心理的要因、栄養状態の関連を検討、ロコモの変化に関連する因子の変移を多角的に検証しました。ロコモは運動器疾患や障害に伴って日常生活自立度が低下する身体状態であり、ロコモの経年変化に影響する要因を検討することで、ロコモの予防だけでなく改善に向けた対策案を考える一助となると考えます。

結果として、ロコモは一年間で一九・一％の人で変化が見られ、ロコモに陥る群は、健常を維持した群と比較して、歩行速度の低下や社会生活や日常の役割・疼痛によるQOLの低下、社会参加の制限が見られました。また、ロコモに陥る群は、ロコモが改善した群と比較して、栄養面で特に植物性タンパク質の摂取量が低く、疼痛や活力、社会生活機能の変化によるQOLの低下が見られました。植物性タンパク質を意識した食生活や、疼痛に影響を及ぼさない範囲での活動量の維持、さらに社会参加を通じて自身の役割に満足し充実感を保ちながら社会的機能を維持することが、ロコモの予防・改善に寄与する可能性が示唆されました。

今後とも御指導御鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

令和7年度 鵬校会総会に出席して

鵬校会 理事 鳴海 晃

鵬校会は昭和二十七年に弘前大学医学部同窓会として発足しました。鵬校会の主な活動は、母校である弘前大学医学部医学科への支援です。各講座が主催する全国規模の学会や国際学会、弘前医学会への助成、弘前大学医学部学術賞者へのメダルの贈呈を行っています。医学部医学科学生への助成としては、医学祭、卒業生および新入生歓迎諸行事、各部活動主管の大会、医師国家試験対策委員会などへの助成も行ってきました。鵬校会報の発行（二年に一回）と、会員名簿を発行（三年に一回）しています。また鵬校会のホームページ（<https://houhukai.com/>）を開設し情報発信しています。

令和七年五月二十四日、令和七年度の鵬校会定時総会が文京町の弘前大学創立50周年記念会館において開催されました。総会に先立ち、柿崎良樹常務理事（昭和五十四年卒）の司会のもと、物故会員に対する黙祷を行いました。はじめに澤田美彦理事長（昭和五十二年卒）の挨拶がありました。議長には田崎博一先生（昭和五十四年卒）が選出され、八木橋勇治監事（昭和四十八年卒）から監査報告がありました。須藤武行常務理事（平成四年卒）から決算報告、庶務・事業報告がありました。その須藤武行常務理事が退任され、新たに野田康子先生（平成元年卒）が理事に就任されました。



小川克弘先生（昭和四十一年卒）から「卒業生数に比べて入会者数が少ないのはなぜか」何か対策を実施しているのか」と貴重な質問をいただきました。それに対して澤田美彦理事長から「コロナ禍に見舞われた状態が引き



令和7年度

実験動物慰霊式

附属動物実験施設長 上野 伸哉
(脳神経生理学講座 教授)

今年度は実験動物慰霊式を六月二十日に執り行いました。完成したデータヘルセンターと動物施設との間の通路を利用し、慰霊碑の前で多くの方々にご参列いただきました。猛暑の中ご出席くださいました皆様に、心より御礼申し上げます。



慰霊式に引き続き、基礎大講堂にて記念講演を開催いたしました。今年度は弘前大学大学院医学研究科麻醉科学講座准教授 榑方哲也先生にお願いし、「臨床医が基礎研究をやる理由」の演題にてご講演いただきました。榑方先生は麻醉科医師としての臨床経験に加え、全身麻酔薬の作用機序、特にノルアドレナリン作動性神経や覚醒維持に関わるオレキシンとの関連について長年研究を続けてこられました。講演では、基礎研究と臨床医療が互いに支え合う重要性を、多くの研究成果とともにわかりやすくご紹介いただきました。



参加した医学科三年次学生にとつて、医療と研究の密接な関係を学ぶ貴重な機会となり、後期の研究室研修での積極的な取り組みに繋がることを期待しています。ここで、施設長として実験動物に関する法制度について触れたいと思います。日本では「動物愛護法」のもとで動物実験が行われていますが、この法律は五年前に見直しが行われており、直近の改正は二〇一九年に行われました。今回の見直しに向けては、「動物愛護法」から「動物福祉法」への転換が検討されています。これは、動物の扱いを「愛護」から「福祉」へと重点を移すことを意味します。具体的には、従来の3R原則(Replacement, Reduction, Refinement)に加えて、「五つの自由」(飢えや渇きからの自由/不快からの自由/痛み・負傷・病気からの自由/恐怖や抑圧からの自由/正常な行動を表現する自由)が明記され、より良い飼育環境の整

令和7年度 弘前大学 成績優秀学生表彰

学務委員長 富田 泰史
(循環器腎臓内科学講座 教授)

成績優秀学生表彰は、各学部(医学部は医学科、保健学科)の各学年で前年度の成績が優秀であった学生を表彰する取り組みで、平成二十一年度(スタート)し、今年で十七年目となります。令和七年八月七日(木)に文京キャンパス・創立50周年記念会館にて「教育に関して優れた業績を上げた教員・成績優秀学生」表彰式が行われました。福田眞作学長から一人ひとりに表彰状と副賞の盾が贈呈されました。学長からは祝辞とともに、今後も大いに活躍されることを期待している旨の激励のお言葉をいただきました。

成績優秀学生については前年度の履修科目の平均点が備が求められる可能性があります。私たち動物実験に携わる者は、いずれにしても法規制を遵守したうえで動物実験を行う責務があります。教職員の皆様におかれましては、今後とも動物福祉に十分配慮した動物実験の実施と、動物実験に携わる学生への適切なご指導を賜りますようお願い申し上げます。

令和7年度 弘前大学医学部医学科・大学院医学研究科 成績優秀学生

医学部医学科2年	南 久生 怜
医学部医学科3年	山中麻里江
医学部医学科4年	古川陽南子
医学部医学科5年	佐々木清順
医学部医学科6年	下倉 佑太
大学院医学研究科2年	福島 聖菜

等をもとに選拔され、医学部医学科からは五名の学生(現在二〜六年次)が、大学院医学研究科からは一名の学生(現在の二年次生)が表彰されました。学生諸君にはこの表彰を励みにさらなる発展を期待しています。



コラム 医学部 二ばね話

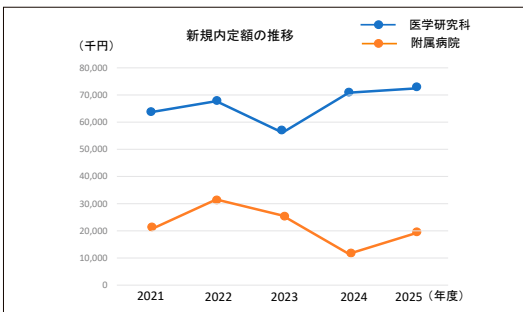
今日はMSA(メディアカル・スチューデント・アシスタント)の話題を「二ばね話」としてみたいと思います。これは早くから研究をしてみたい!という学生を支援する取り組みで、配属講座での研究補助をしながら時給千円が頂けるという魅力的な副業(バイト)です。初年度であった昨年は学年を限定しての募集でしたが、今年は研究意識の高い学生をなるべく多く採用しよう!という方針で募集をかけたところ、なんと全学年から三十八人の応募がありました。研究力が落ちていくといわれるこのご時世にもかかわらず、研究したい学生がこんなにいるのか!と大変うれしく思います。

J-PEAKS 採択大学に 相応しい採択実績を 目指しましょう!

(全学) 研究委員会委員 伊東 健
(分子生体防衛学講座 教授)

医学研究科および附属病院における令和七年度の科学研究費補助金採択状況が公表されました。まずは新規交付内定額の表と年次推移のグラフをご確認下さい(いずれの年度も比較のために八月一日現在の時点での途中経過の値を使用しています。そのため海外連携研究(旧 国際共同研究強化(B))は集計から除いています)。医学研究科における新規の交付内定額は昨年度に比べ百五十万円ほど増加し、附属病院では七

百五十万円ほど増加しました。新規の採択率も、医学研究科では四%ほど、附属病院では七%ほど増加しましたので、全体として昨年度と比較していい成績となりました。附属病院は昨年度の成績が悪かったことを考えると、例年のレベルに持ち直したということが言えるかもしれません。来年度に向けては、J-PEAKsに採択されてからの初めての申請ということもあり、それに相応しい数字をあげたいものです。申請書は指導教



○令和7年度科研費 申請・内定状況(新規)

部局名	申請件数	採択件数	採択率(%)	交付内定額(千円)
医学研究科	142	33	23.2%	72,410
医学部附属病院	93	14	15.1%	19,060
計	235	47	20.0%	91,470

○令和6年度科研費 申請・内定状況(新規)

部局名	申請件数	採択件数	採択率(%)	交付内定額(千円)
医学研究科	140	27	19.3%	70,850
医学部附属病院	89	7	7.9%	11,520
計	229	34	14.8%	82,370

○令和5-7年度科研費 研究種目別内定状況(新規)

研究種目名	医学研究科			医学部附属病院			合計		
	R5	R6	R7	R5	R6	R7	R5	R6	R7
基盤研究(S)							0	0	0
基盤研究(A)							0	0	0
基盤研究(B)	1	2	2				1	2	2
基盤研究(C)	17	18	20	9	3	7	26	21	27
学術変革領域研究(B)		2					0	2	0
挑戦的研究(開拓)			1				0	0	1
挑戦的研究(萌芽)	1						1	0	0
若手研究	10	5	9	4	3	6	14	8	15
研究活動スタート支援			1				0	0	1
特別研究促進費							0	0	0
研究成果公開促進費							0	0	0
特別研究員奨励費							0	0	0
奨励研究				1	1	1	1	1	1
合計	29	27	33	14	7	14	43	34	47

外科手術体験セミナー in 青森を開催して

消化器外科学講座 助教 鶴田 覚

二〇二五年六月二十一日、青森県立青森高等学校第一体育館において、第十六回「外科手術体験セミナーin青森」を開催しました。本セミナーは、外科医や医学生と共に手術手技を模擬体験することで医療職への理解を深め、進路選択の一助とすることを目的としています。青森県内の高校生六十四名が参加し、四時間の充実したプログラムを実施しました。スタッフとして県内外医療機関の外科医師三十五名、初期研修医十名に加え、弘前大学医学部学生十五名が参加し、熱心に指導を行いました。高校生は術衣・マスク・手袋を着用し、手術現場さながらの環境で外科手技を体験しました。石戸圭之輔准教授と阿部純弓先生による地域医療や外科医の役割に関するミニレクチャーでは、眼を輝かせながら話を聞いていました。体験プロ



実際の手術機器を用いた手術操作に挑戦する高校生達

グラムは①手術室体験コーナー（電気メスや自動縫合器による切開・吻合体験）、②超音波メスコーナー（生体組織モデル切離と機器原理の学習）、③縫合コーナー（皮膚・腹壁モデルを用いた閉創・閉腹手技）、④鏡視下手術トレーニング（腹腔鏡基礎操作と映像認識の練習）、⑤内視鏡外科3D手術体験（立体映像による臨場感あるシミュレーション）の五項目であり、参加者は集中して取り組み、達成感を味わいました。事後のアンケートでは、「医師の仕事を具体的に知ることができた」、「難しかったが、できたときの達成感が大きかった」などの回答があり参加した高校生達の満足度の高さがうかがえました。中には「今回の経験が医学部志望の決定打になった」という感想もあり、本セミナーの反響の大きさを感ずることができました。また、運営スタッフにとっても、将来の医療を担う可能性のある高校生と直接触れ合い、外科の魅力や地域医療の果たす社会的役割の大きさを再確認する貴重な機会となりました。本セミナーは、青森県、青森県教育委員会、青森医学振興会、NPO法人外科支援機構弘前ならびに関連医療機器企業等による産官学連携事業として二〇〇九年に開始し、コロナ禍の二年を除き、今年で十七年目、十六回目の開催となります。県

学生だより

弘前大学に入学して

弘前大学に入学して

医学科一年 工藤 逞仁

弘前大学に入学してから早くも三か月が経過した。この三か月で入学当初に抱えていた不安は徐々に和らいでいき、勉強や部活動など様々な面で充実した学生生活を送ることができている。

勉強面について、まず感じたのは大学では自由度がかなり高いということだ。最初の履修登録ではある程度の条件はありつつも自分で教養科目を選択することができ、さらに、テストがない科目は自分のペースで学ぶことができる。このように、高校生のときに比べてかなり自由度が高く、勉強以外でも同じように自由度が高いため、自分のことは自分で管理しないといけないというのが大学生の最

弘前大学のポスター『学部は、暮らす街でもある。』…私にとって弘前、そして弘前大学はまさにそのイメージ通りの場所です。地元神奈川を離れ、ここ弘前で始まった新生活。何もかもが「初めて」だったけれど弘前は私を丸ごと受け入れてくれました。背伸びせず、肩ひじ張らず、自然体で過ごせる環境。そして「学びたい、やってみたい」を叶えてくれる環境が弘前大学にはあります。医学部に入ってから出会った同級生や先輩方はそれぞれ異なるバックグラウンドを

学生だより

解剖学実習を終えて

解剖学実習を終えて

医学科二年 木村 雪花

私は入試に合格し医学の道に進むことを許されたときからずっと、医学を学ぶというものの覚悟について考えてきました。それは医学の根底に苦しむ人や生き続けることができなかった人の存在があり、目をそらした。それに反応した学生の一人が早速希望者を募って先生に調整していただき、現場を見学することができました。学生の興味関心、学びたいという気持ちを受け止めて下さる先生方、学ぶ機会と場を惜しみなく提供してくれる学校。そしてその機会を存分に生かそうとする学生たち。本当に恵まれた学びの場だと思います。

私の学生生活には部活動も欠かせません。入部した水泳部は、先輩や他学部の学生との交流を通して、私にとつて居心地の良い癒しの場所になりました。授業前のひと泳ぎで一日を清々しくスタートできています。放課後には医療系サークルにも参加し、他大学の学生たちと意見交換したり、地域医療について学んだりしています。

毎日が充実していて、地元を離れた寂しさを感じる暇もなくあつという間にか月が経ちました。弘前大学医学部の一員として、今ここにいられる幸せを日々実感しています。

解剖学実習を通じて、私たちは教科書や講義だけでは決して得られない、深い学びと気づきを得ることができました。教科書に当て

弘前大学に入学して

医学科二年 高見 一葉

弘前大学のポスター『学部は、暮らす街でもある。』…私にとって弘前、そして弘前大学はまさにそのイメージ通りの場所です。地元神奈川を離れ、ここ弘前で始まった新生活。何もかもが「初めて」だったけれど弘前は私を丸ごと受け入れてくれました。背伸びせず、肩ひじ張らず、自然体で過ごせる環境。そして「学びたい、やってみたい」を叶えてくれる環境が弘前大学にはあります。医学部に入ってから出会った同級生や先輩方はそれぞれ異なるバックグラウンドを

弘前大学のポスター『学部は、暮らす街でもある。』…私にとって弘前、そして弘前大学はまさにそのイメージ通りの場所です。地元神奈川を離れ、ここ弘前で始まった新生活。何もかもが「初めて」だったけれど弘前は私を丸ごと受け入れてくれました。背伸びせず、肩ひじ張らず、自然体で過ごせる環境。そして「学びたい、やってみたい」を叶えてくれる環境が弘前大学にはあります。医学部に入ってから出会った同級生や先輩方はそれぞれ異なるバックグラウンドを

解剖学実習を終えて

医学科二年 櫻田 万葉

解剖学実習を通じて、私たちは教科書や講義だけでは決して得られない、深い学びと気づきを得ることができました。教科書に当て

解剖学実習を通じて、私たちは教科書や講義だけでは決して得られない、深い学びと気づきを得ることができました。教科書に当て

か、学習を進める中で徐々にその割合は減り、篤志をもって私たちに学習の機会をくださった先生の期待に応えられるよう、誰よりも多くのことを学習してみせたいという思いが強くなっていきました。なぜなら、死を迎えてなお自身の意思を遂行している先生の姿はとても頼もしく、その決意に恥じない姿勢で学習したいと改めて感じたからです。

私は敬意と覚悟をもって班員に恵まれ、実習期間全体を通して丁寧に根気よく解剖・同定を行うことができました。また、不明な点はすぐにその場で質問して解決し、学んだことを確実に班内で共有しながら学習を進められました。もしもできることならば、ご献体くださったご遺体の先生に学習の成果をお伝えしたかった。私たちがどれだけ熱心に取り組み、どれだけ多くのことを学ばせていただいたのか、その成果と感謝、学べることの喜びをご本人に直接お話しして、感謝の気持ちと敬意を表したかったと強く思います。しかしながら実際にはそのよう

なことは不可能です。だからこそ、生涯をかけて患者さんに寄り添える医師になることで恩返しをしたいと感じました。携わる人々への感謝を忘れず、謙虚に医学の道を歩んでいきます。

はめられない構造も多々存在し、それを自分の目で確かめ、手で触れて学ぶ中で、改めて人体の構造の精緻さ（次ページへ続く）

(前ページより)

今後も生涯にわたり学び続け、患者さんに思いやりをもって寄り添える医師を目指して努力してまいります。貴重な学びの機会を提供してくださっている患者

クリニカルクラシックについて

医学科五年 八谷 瑠奈

三月から始まったクリニカルクラシックも早いもので五か月が過ぎ、五年生の夏休みを迎えました。もうクリクラの半分弱を終えたのだと思うと、あっという間に感じます。

これまでの座学では、疾

患の病態や治療法について知識として学んでいたものの、臨床との結びつきが想像できず、学びに対する実感を持ちにくいことが多くありました。しかし、クリ

クラが始まり、実際に患者さんと接し、診療の流れの中で学ぶようになってから、今まで点でしかなかった知識が初めて線としてつながる感覚がありました。時には、指導医の先生の質問にうまく答えられず、もっと勉強しておけばよかったと後悔する場面もあります

が、実習を重ねるごとに自分の理解が深まっていくことが実感でき、その過程にやりがいを感じています。一方で、難しさを強く感じるのが「人との接し方」です。患者さんにとってつらいことを伝える場面を見学する中で、事実を正しく伝えることと、患者さんやご家族の気持ちに寄り添うことのバランスがいかに難しいかを痛感しました。また、チーム医療において

は、知識や技術だけでなく、

様とご家族の皆様、そして日々ご指導くださる先生方や医療関係者の皆様に、心より感謝申し上げます。引き続きご指導・鞭撻のほど、よろしくお願い申し上げます。

んやご家族の生活背景や価値観、意思を尊重したうえで方針を決めていくことの重要性を学びました。マニュアルでは対応しきれない「人」を相手にする医療の難しさや奥深さを感じると同時に、自分も将来、患者さんの立場に寄り添える医師になりたいという思いが一層強くなりました。

先生方や患者さん、医療スタッフの方々など、多くの人に支えられて学ばせていただいているという感謝の気持ちを忘れず、後半の実習ではさらなる努力を重ねて、医学的知識と技術だけでなく、人間としても成長できるよう努めたいと思います。

学生だより 台湾・馬偕醫學院での臨床実習を終えて

台湾・馬偕紀念醫院で出会った医療の姿と、人とのつながり

医学科六年 伊藤 紳一郎

この度、三月九日より四週間の間、台湾の馬偕紀念醫院で臨床実習を行わせていただきました。台湾での実習が決まった時には、異国の地での生活や臨床実習生として医療に参加すること、期待で胸を膨らませていました。しかし、出発が近づくにつれ、言語や文化の異なる環境でどれだけ学び吸収できるのか、現地の医療風土や価値観の違い、そして学生や先生方との出会いがどのようなものか、期待と共に不安も頭をもたげてきました。

馬偕紀念醫院で臨床実習を行ううち、そのような心

し、次の実習でより多くのことを学び取るべく過ごす中で、四週間はあっという間に過ぎていきました。この期間中、馬偕紀念醫院の先生方や学生とも多く交流することができ、台湾の文化や医療事情に触れると同時に、学生たちとは、環境は違えど同じく医師を志す者として学生生活の楽しさや苦勞を共有し合えたのも良い経験でした。

今回の台湾での臨床実習を通じて、知識や技術だけでなく、異文化の中で医師として大切にすべき姿勢や、柔軟なコミュニケーション力の重要性を実践しながら学ぶことができました。また現地学生の何人かは今年の秋に弘前大学に学びに来る予定であり、そこでの再会に向け、医学の専門知識だけでなく、弘前の魅力を伝えられるよう語学力もさらに磨いていきたいと感じています。最後に、今回このような素晴らしい機会を与えてくださった本学の先生方、そして温かく迎えてくださった馬偕紀念醫院の先生方や学生の皆さんに、心より感謝申し上げます。



Pediatric Cardiology のスタッフのみなさんと

医療の多様性に触れて 馬偕紀念醫院での一か月

医学科六年 下倉 佑太

台湾・馬偕紀念醫院での臨床実習では、前半二週間で、四週間の間に、環境は違えど同じく医師を志す者として学生生活の楽しさや苦勞を共有し合えたのも良い経験でした。

今回の台湾での臨床実習を通じて、知識や技術だけでなく、異文化の中で医師として大切にすべき姿勢や、柔軟なコミュニケーション力の重要性を実践しながら学ぶことができました。また現地学生の何人かは今年の秋に弘前大学に学びに来る予定であり、そこでの再会に向け、医学の専門知識だけでなく、弘前の魅力を伝えられるよう語学力もさらに磨いていきたいと感じています。最後に、今回このような素晴らしい機会を与えてくださった本学の先生方、そして温かく迎えてくださった馬偕紀念醫院の先生方や学生の皆さんに、心より感謝申し上げます。

化していったように思います。後半の小児科実習、特に新生児センターでは、指導医や教授による丁寧な個別指導を受けることができました。健康新生児であっても一定期間入院管理され、かつ面会制限があるなど日本との違いにも多く気づかされ、医療のあり方が一つではないことを実感しました。今回の実習で得られた視点や学びを、今後の研鑽にしっかりと活かしてまいります。実習期間中は現地の学生の皆さんが積極的な声をかけてくださり、食事に誘っていただいたり、観光地を案内してくださったりと、慣れない環境のなかで心強い支



李教授と

OB
OG

書籍出版物の紹介

Vol.1

書評 中路重之

「寿命革命」

著：継田治生 監修：村下公一、中路重之 ダイアモンド社

監修者が書評を書くこと自体恐縮な話なのですが、弘前大学でongoingな研究活動の紹介本ですから、あえて内容説明をさせていただきます。

本のタイトルは「寿命革命」。弘前大学で今行われている短命県返上を目指したCOI、COI-NEXTの研究活動（文部科学省の支援）を扱っており、村下公一（COI-NEXT拠点長）と中路が監修しました。体裁は20を越すインタビューによるオムニバス方式で、インタビューのなかには、福田眞作学長をはじめ、三村申吾前青森県知事、櫻田宏弘前市長、小宮山宏元東京大学総長も含まれます。

COIとはCenter Of Innovationの略です。弘前大学COI拠点活動は2013-2021年度、その後継事業と言うべきCOI-NEXTは2022年度から最長10年間の取り組みです。これらの活動は、2024年度、文部科学省による「地域中核・特色ある研究大学強化促進事業（J-PEAKS）」の採択につながりました。

これら一連の大型研究を串刺しに

しているテーマが「寿命革命」です。青森県は日本一の短命県ですが、弘前大学は岩木健康増進プロジェクトを中心とした健康ビッグデータをプラットフォームに産官学界が集結し、そこに生まれたオープンイノベーションで短命県返上の実現を目指しています。その過程で企業を巻き込んだ経済効果が生まれ、社会（人）のプラットフォームも創生されています。言い換えれば、地域起こし、地方創生を起こしつつ短命県返上、県民のウェルビーイングの向上を目指しているのです。

「短命県返上なんてそう簡単ではないさ」、「どうせうまくいかないよ」という声も聞かれますが、だからこそそのような社会全体の本気の取り組みが求められるのです。

平均寿命とは、社会力を表す数少ない最終指標の一つですが、それが故にその裾野は膨大多岐であり、やるべきことも多くなります。したがって本研究事業の全体像の把握は簡単ではなく、それが本書誕生の所以でもあります。

是非ご一読願いたい一冊です。

台湾・馬偕醫學院での臨床実習を終えて

医学科六年 森 萌 音

今年の三月十日から四月四日までの一か月間、台湾の馬偕記念病院で臨床実習を行いました。本院は台北にあります。多くの学生は淡水にある分院に併設されている寮に住みながら、診療科に合わせてそれぞれの病院に行き実習しています。私は前半を淡水の一般内科の胸腔内科グループ、後半は台北の産婦人科で実習しました。

全体的にどの診療科も朝が早く、七時半からカンファレンスが行われることも多かったですが、その際には飲み物と軽食が用意されておりそれを食べながら参加することができました。実習では、一緒にその科を回っている学生が、英語に訳したり処置などについて解説を付け加えてくれたりしてくれました。台湾では患者さんや医療スタッフとの会話や業務連絡は中国語で行われますが、医学用語は英語をそのまま使うものが多く、カルテはすべて英語で記載します。日常的に英語を使うため自然と医療英語が身に付く環境であると感じました。また、高齢の患者さんの中には中国語とは全く異なる台湾語を主に使う方も多く、回診などでは、医師が患者さんに話しかける際に台湾語に切り替えるという場面もありました。地域によって偏りがありますが、若い世代では台湾語があまりわからないか、聞いてわかるけど話せないという人も多く、弘前



が近くのおすすめの屋台を紹介してくれたり、実習外の時間で観光に連れ出してくれたり、台湾の食や観光も楽しむことができました。一か月間、医学を通して現地の学生とたくさん交流でき、日本との違いや台湾の文化を知ることができた貴重な経験となりました。

台湾・馬偕醫學院での臨床実習を終えて

医学科六年 南 家 孝 彦



私は台湾の馬偕記念病院で一か月の臨床実習に参加しました。前半二週間は精神科、後半二週間は循環器内科を中心に学び、現地の学生や指導医の先生方と多くの交流を持つことができました。精神科では、統合失調症や双極性障害、うつ病など典型的な症例を通じて医師と患者の向き合い方を学びました。電気けいれん療法の見学や手伝いなどをさせていただく機会もありました。

循環器内科では、心不全や弁膜症、深部静脈血栓症などの病棟管理からPCIや冠動脈造影の手術を見学させていただきました。日本と台湾の保険のシステムの違いによる治療方針の変化なども教えていただきました。世界から見た日本の姿を知ることができました。何よりも印象的だったのは現地の学生の積極性と温かさです。中国語が分からない私に対して、回診を回った際やカンファレンスの際にその場でできる限り英語に翻訳してくれ、スムーズに実習に参加することができるよう助けてくれました。また学ぶ姿勢も非常に積極的で、班員の誰かが常に指導医に質問を投げかけて、沢山のものを吸収しようとする姿には刺激を受け、自分の学びに対する姿勢を見つめ直すきっかけとなりました。

若手教員・医師だより

神経解剖・細胞組織学講座 助教 齊 藤 絵里奈

私は神経解剖・細胞組織学講座で助教を務めております。この度は「若手教員・医師だより」への執筆の機会をいただき心より感謝申し上げます。

私は当講座に赴任して今年で十二年目になります。担当科目は組織学、組織学実習、神経科学、神経解剖実習、研究室研修などを担当しております。教員として日々感じるのは、学生さんたちから学ぶことの多さです。授業の中で寄せられる質問や意見は、私自身の視野を広げてくれますし、時には新しい発見やアイデアの種にもなります。学生の皆さんが持つ多様な価値観とつながっています。

研究面では当講座に着任して以来、リンパ管に関する研究を進めてまいりました。リンパ管系は血管系と比較して致死的疾患との関連が乏しいため長らく研究対象としては限定的でしたが、近年になりがんの転移機構やアルツハイマー病など神経変性疾患における病態生理への関与が明らかとなり、国内外において本分野の研究活動が急速に活発化しています。私はもともと魚類の免疫系を研究していた経緯から、脊椎動物の進化過程におけるリンパ管系の確立について、魚類から哺乳類まで系統発生学的視点で研究を行ってまいりました。特に、水棲から陸棲への移行という進化上の大きな変化がリンパ管系に与える影響に着目し、魚類や両生類のリンパ管系を色素注入法で調べました。その結果、両生類では腹腔・腎臓系路が余剰体液の排出に深く関与することが分かり、昨年この成果を学会で発表し学会賞を受賞することができました。また、近年ヒトの脳老廃物処理システムとして注目されているGlymphatic systemについても昨年より研究を開始し、

第11回 若手研究者紹介動画

医学研究科では、各講座で研究されている40歳未満の若手研究者に、現在取り組んでいる研究内容や、研究を志したこれまでの経験を自ら紹介いただくことで、他の若手研究者や学部学生の研究に対する意欲を養うことに加え、紹介した若手研究者自身のモチベーションを向上させることを目的として、「研究者紹介動画」を作成・公開する取り組みを始めました。

第11回目は胸部心臓血管外科学講座の渡邊 崇人（わたなべ しょうと）先生。『心臓弁膜症大動脈弁狭窄症（AS）の原因となる大動脈弁石灰化のメカニズム解明とその亢進を抑える薬物の開発』についてご紹介します。

医学研究科ホームページで公開中！

紹介動画はこちら ↓



助手 渡邊 崇人
(胸部心臓血管外科学講座)



若手教員・医師だより

消化器外科学講座 助教 鶴 田 寛

消化器外科学講座の鶴田寛です。この度は本誌に寄稿させていただく機会を賜り、大変感謝申し上げます。私は二〇一四年に本学医学部を卒業し、初期研修を経て消化器外科医として歩み

はじめました。その後、県内外の病院で手術・診療経験を積み、肝胆膵疾患や消化器癌など、幅広い消化器外科手術や基礎研究に携わってきました。ここでは、私が消化器外科一年目（卒後

な変化がリンパ管系に与える影響に着目し、魚類や両生類のリンパ管系を色素注入法で調べました。その結果、両生類では腹腔・腎臓系路が余剰体液の排出に深く関与することが分かり、昨年この成果を学会で発表し学会賞を受賞することができました。また、近年ヒトの脳老廃物処理システムとして注目されているGlymphatic systemについても昨年より研究を開始し、

当講座の強みを生かした研究を精力的に進めているところですが、こちらの研究成果についても近々ご報告できると思っていますのでご期待ください。新しいことをやれば、必ずしっくりくる。腹が立つ。だから、寝る時間、食う時間を惜しんで、何度でもやる。さあ、昨日までの自分を超えろ。』当時の私は、日々の手術修練や勉強に追われながらも、成果を焦つ

(次ページへ続く)



微生物学講座は二〇〇六年、細菌学講座と寄生虫学講座が統合され、中根明夫前教授のもと新たに設置されました。二〇一九年より私（浅野クリスナ）が教授を拝命し、現在は、二〇一七年に寄附講座として加わった生体高分子健康

科学講座（中根明夫特任教授）と共に、医学分野における教育と基礎医学研究を担っています。教育面では、微生物学分野で細菌・真菌・ウイルス・寄生虫についての基礎的知識、感染症の発症メカニズム、予防法、治療法に至るまで、幅広いテーマを網羅しています。微生物学実習では、講義内容と連動した実験を通じた学習内容の定着と、実験手技・研究アプローチの修得を重視しています。学ぶ範囲は広いですが、臨床医学の根幹を支える基盤的知識や、将来的な研究への興味を喚起することを目標としています。



体の病原性を個別に調べてきましたが、実際の感染組織では複数種の微生物が混在し、複雑な相互作用を通じて感染が成立したり、病原性が増幅されたりすることが明らかとなつています。したがって、単一病原体の研究だけでは、多菌性感染症の本質的な解明や実際的な問題解決には不十分であると考えています。現在は、日和見病原菌感染における「病原菌・宿主間」「病原菌同士」の相互作用に着目し、とくに細胞外小胞がこの相互作用のメカニズムと考える点に注目しています。私たちは、細菌や宿主間、または細菌同士の間で情報伝達や機能伝達を担う細胞外小胞の分子および作用機序を解明し、こうした知見を将来的に感染症の病原性抑制やワクチン、また抗菌物質を運搬する新たなメッセンジャーの開発といった応用の可能性を目指しています。生体高分子健康科学講座では、地元企業を含む複数の民間企業との産学連携を積極的に進めています。その中で、高分子プロテオグリカンによる炎症抑制効果や、あおりも藍に含まれる

感染生体防御学講座

教授 浅野 クリスナ

（前ページより）
て求めていた時期でした。この言葉を目にしたとき、最初は「努力は報われない」という厳しい響きに戸惑いましたが、その先にある「それがどうした」「スタートはそこからだ」に強く心を動かされました。失敗や挫折は避けられない現実ですが、今ではそれを前提に挑み続ける姿勢こそが、外科医の成長の原動力であると感じています。消化器外科のやりがいは、まさにそこにあります。大きな手術を乗り越えて患者さんが退院される瞬間、その後の生活が回

復していく過程に立ち会えることは、何にも代えがたい喜びです。命に直結する技術の修練を必要とする領域でありながら、新しい知識や技術を吸収し続けられる環境がここにはあります。私は今でも日々挑戦の連続ですが、仲間と知恵を出し合い一歩ずつ進む日々はとても充実しています。もし「挑戦してみたい」と思っただけの方いたら、ぜひ私たちと一緒に消化器外科の世界へ飛び込んでください。失敗も成功も糧にしながら、昨日までの自分を超越する喜びを共に味わいましょう。

皮膚科学講座

皮膚科学講座 教授 赤坂 英二郎

弘前大学大学院医学研究科皮膚科学講座は、七十年以上の歴史を有する教室で、成分の抗ウイルス・抗菌作用の解明を進め、これらについて既に特許申請・取得も行うなど、地域社会への貢献と知的財産の創出にも力を入れています。私たちの講座は、臨床部門とも密接に連携し、基礎と臨床をつなぐトランスレーショナル・リサーチにも積極的に取り組んでいます。研究室のメンバーは、私を含め三名のスタッフおよび外国人ポスドクで構成され、国際色豊かな環境となっています。さらに、大学院生や学部学生も加わり、開かれた教育と研究の場を提供することを目指しています。

本講座では、今後も感染症研究の最先端を切り開くべく、教育・研究の両輪をもつて貢献していく所存です。あり、これまで二百名を超える優れた皮膚科専門医を青森県内外に輩出してきました。現在、医師二十一名（教員七名、大学院生六名を含む）、留学生一名で、日々楽しく診療・研究・教育に取り組んでいます。皮膚科で扱う疾患は約二千個に及ぶといわれています。その中で専門外来を設けて重点的に診療を行って

検査結果をもとにした表皮水疱症やボルフィリン症などの遺伝性皮膚疾患の遺伝型表現型相関の解析、2) DPP30 コンディショナルノックアウトマウスを用いた水疱性類天疱瘡の発症機序の解明、3) 皮膚悪性腫瘍におけるゲルコーストランスポーターと腫瘍の進展や予後の相関の解析、4) 岩木健康増進プロジェクトを利用した皮膚バリア機能と皮膚細菌叢の関係、などをメインテーマとして研究しています。皮膚科学研究の醍醐味は、誰にでも見える皮膚を通して、誰も見たことのない世界を追求することです。日々、患者さんの皮膚をみていると本当に不思議なことだらけで、ワクワクするようなサイエンスにあふれています。診療で生じた疑問を自らの研究で明らかにし、それを診療にフィードバックしていくことで、より多くの患者さんが

健康な皮膚とともに、豊かな人生を歩むことができるようになることを信じています。これからは、私たちは、医学生・研修医・専攻医の教育に注力し、患者さん一人ひとりに最善の医療を提供するとともに、常に新しい知見を探索していくことで、教育・診療・研究の三位一体の発展を目指してまいります。これからもご指導、ご協力のほどお願い申し上げます。



公益社団法人 青森医学振興会

【沿革】 平成11年3月1日 弘前大学医学部医学科後援会鵬桜医学振興会発足（任意団体）
平成13年4月2日 社団法人青森医学振興会設立認可
平成24年4月1日 公益社団法人青森医学振興会へ移行認定

当会では、青森県の医学・医療の発展を促進するため、次の事業活動を行っております。
○医学教育活動の活性化を図るための事業への支援
○医学・医療の高度化に資する医学研究事業への支援
○地域医療の振興に寄与する事業への支援
○海外との学術交流等の活性化を図るための事業への支援

◎寄附のお願い

青森県の医学・医療の発展を促進するための各事業活動の一層の充実を図って参りたいので、皆様の格別のご支援・ご協力をよろしくお願いいたします。随時、ご寄附を受け付けております。

本会の公益目的事業に対する寄附金は、確定申告をしていただくことにより税制上の優遇措置の対象となります。

◎当会への入会のお願い

当会の事業活動に継続的にご支援・ご協力をいただける方は、ご入会くださるようお願い申し上げます。年会費は次のとおりとなっております。

	会員種別	年会費
会費	医学部教員	1万円
	医学部卒業生等	2万円
	賛同する個人	2万円
	賛同する団体	10万円

◎ご支援ご協力いただける方のご連絡をお待ちしております。

➔ 【問合せ先】 公益社団法人青森医学振興会事務局
TEL・FAX 0172-40-2872
学内内線 6519
E-mail : info@aomori-mpm.jp

部活動紹介

ブラジリアン柔術

医学科三年 對馬 魁



弘前大学ブラジリアン柔術部部長の對馬魁です。昨年設立されたばかりの部活で、ご存知でない方からは、ブラジル？柔道？といった声が聞こえてきそうですが、実は今世界で波に乗っているこの競技、ルーツは弘前にあります。日本の柔道が海を渡りブラジルで発展し、その後、再び日本へ逆輸入される形で広まったブラジリアン柔術。この橋渡しをした人物こそが、弘前で生まれ育ち柔術を学んだ前田光世でした。弘前城下に広がる弘前公園には、前田光世氏の功績を称える石碑が置かれています。そんな地でブラジリアン柔術を学べるのは、きつと特別なことだと思います。

本部活は顧問に浅野クリスナ教授を迎え、医学部を拠点としながらも、他学部の学生や女性部員も所属しており、現在の部員数は二十二名。初心者から経験者まで、そして柔道や空手など他の武道経験者まで、多様なメンバーが集まり、活気あふれる雰囲気です。私たちが活動しているのは、月二回、隔週火曜日。活動場所は弘前城近くの笹森記念体育館で、歴史ある城下町の風情を感じながら練習に励んでいます。また、

地域医療サークルココプラ

医学科五年 野々山 航士

弘前大学医学部医学科五年の野々山航士です。私が代表を務める「地域医療サークルココプラ」は、地域医療を学び、議論し合えるコミュニティを作りたいという思いのもと、昨年十二月に発足しました。現在は、ゲノム生化学講座の藤井穂高教授と、総合診療部の米田博輝先生に顧問としてご指導いただいています。サークル員は総勢十五名で、一・二年生が多くを占めています。主な活動は、週一回の定例会と月一回の学習会です。定例会では、サークル員が関心を持ったニュースや自由なテーマをもとに、プレゼンや自由な意見交換をしています。医師の働き方や地域枠についてじっくり議論することもあれば、大好きなデイズニーの話や、日頃頑張っているアルバイトの話など、内容は多岐にわたります。時にはバドミントンや卓球といったレクリエーションを楽しんだり、B B Qで交流を深めたりすることもあります。定例会は毎週水曜日十八時から、弘前大学附属図書館医学部分館のミーティングルームで行っていますので、ご興味

があればぜひお気軽にお越しください。学習会では、県内の先生方や医療従事者の方々をお招きし、講義やグループワークを行っています。例えば四月の学習会では、米田先生から患者さんの病状理解に役立つ「CaseとIllness」の考え方について教えていただきました。また、五月の学習会では、十和田市立中央病院で後期研修医をされている白戸蓮先生をお招きし、医師のキャリア形成と自己分析についてお話しいただきました。どちらの学習会も、低学年のうちから楽しく学ぶことができ、大変有意義な時間となりました。さらに、今年は札幌で開催された日本プライマリ・ケア連合学会学術大会に参加しました。来年度以降は、学会発表も目指していきたいと考えています。ココプラのサークル員は、部活動やアルバイトなどと並行して活動している学生がほとんどです。それぞれが自分の関心や目標に向かって、一生懸命に取り組んでいます。私は、サークル員同士が、今興味を持っていることや頑張っていること、将来になりたい医師像や夢など、普段は話にくいような真面目なテーマについても、真剣に意見交換できる場に大きな価値があると感じています。ココプラに興味をお持ちの方、地域医療に関心のある方、どんな方でも大歓迎です。ぜひお気軽にお声がけください。cocopula.hirosaki.univ@gmail.com

人事異動 (R7.6.1 ~ R7.8.31)

●医学研究科所属

【配置換】

発令日	所 属	職 名	氏 名	前 所 属
R7.6.1	病理診断学講座	准教授	吉澤 忠司	病理生命科学講座
R7.6.1	病理診断学講座	助教	後藤 慎太郎	病理生命科学講座
R7.8.1	人体病理学・病理診断学 (講座名称の変更)	教授	黒瀬 顕	病理診断学講座
R7.8.1	人体病理学・病理診断学 (講座名称の変更)	准教授	吉澤 忠司	病理診断学講座
R7.8.1	人体病理学・病理診断学 (講座名称の変更)	助教	鎌滝 章央	病理診断学講座
R7.8.1	人体病理学・病理診断学 (講座名称の変更)	助教	後藤 慎太郎	病理診断学講座
R7.8.1	整形外科科学講座	助教	荒木 亮	附属病院整形外科

【辞職】

発令日	所 属	職 名	氏 名	異 動 先 等
R7.8.31	社会医学講座	特任准教授	吉田 一隆	グローバルWell-being 総合研究所 准教授
R7.8.31	眼科学講座	助手	古川 智美	

臨床教授・臨床准教授新規称号付与者 (令和7年4月1日付)

称号名	氏 名	所 属	称号付与期間
臨床准教授	齋藤 新	弘前脳卒中・リハビリテーションセンター 内科部長	2025年6月1日 ~2028年5月31日

●附属病院所属

【昇任】

発令日	所 属	職 名	氏 名	前 所 属
R7.8.1	呼吸器内科・感染症科	講師	田中 寿志	呼吸器内科学講座 助教

【採用】

発令日	所 属	職 名	氏 名	前 所 属
R7.6.1	整形外科	助教	荒木 亮	弘前総合医療センター
R7.7.1	整形外科	助教	石橋 光	JCHO 秋田病院

【配置換】

発令日	所 属	職 名	氏 名	前 所 属
R7.8.1	整形外科	助教	太田 聖也	整形外科科学講座

【辞職】

発令日	所 属	職 名	氏 名	異 動 先 等
R7.6.30	整形外科	助教	山内 良太	JCHO 秋田病院
R7.7.13	脳神経内科	助手	三上 洋平	八戸市立市民病院

診療教授等新規称号付与者 (R7.6 ~ R7.8)

称 号	氏 名	所 属	期 間
診療講師	藤田 彩香	リハビリテーション科	令和7年6月1日~令和10年5月31日

編集後記

無事、皆さまに医学部ウォーカー第百十四号をお届けすることができました。ご寄稿いただきました多くの先生方、学生の皆さんに心より御礼申し上げます。ご協力、誠にありがとうございました。

ここ数年、猛暑の夏が続いておりますが、今夏も例にもれず大変暑い日が続きました。学生時代、エアコンのないアパートに住み、先輩から「ねぶたが終われば涼くなるよ」と言われていた時代も、今は昔となりました。また、今年の夏は終戦から八十年という節目の年であり、改めて平和な社会に生きることの尊さを強く感じさせられました。

本号では、弘前大学医学部の学生や教職員が、地域医療、研究活動、教育活動、そして日々の学業や部活動などに取り組み姿を数多くご紹介できたと思います。取材を通じて、日々の努力や小さな挑戦の積み重ねが、やがて実り多い成果を生み、その先に弘前大学全体の成長という確かな未来があることを改めて実感しました。

これからも医学部ウォーカーは、学内外の皆さまにとって、温かさや新たな発見のある情報源であり続けたいと考えています。次号以降も、皆さまからの多くのご寄稿をお待ちしております。

